

ねん がつ にち
2020年3月22日
しじゅんせつだいよんしゅじつ
四旬節第四主日
きくち いさおだいしきょう せつきょう
菊地 功 大司教 ミサ説教

わたしたちは、^{きび ちょうせん う つづ}厳しい挑戦を受け続けながら、^{ことし しじゅんせつ す}今年の四旬節を過ぎ
ております。^{きょうかい れきし なか はじ おも}教会の歴史の中では初めてではないのだろうと思いますが、
^{わたし ふく おお ほう しんこうせいかつ なか たいけん}しかし、私を含めて多くの方が、信仰生活の中でこれまでに体験し
^{じたい そうぐう こんわく}たことのない事態に遭遇し、困惑しています。

^{しじゅんせつ せんれい さいしゅうてき じゅんび せんれいしがんしゃ あゆ}四旬節は、洗礼の最終的な準備をしている洗礼志願者と歩みを
^{したが しんこう ふ かえ}ともにしながら、キリストに従うわたしたちが、信仰を振り返り、イエス
^{であ げんてん た かえ きせつ かんせんしょう かくだい よういん}との出会いの原点に立ち返ろうとする季節です。感染症の拡大が要因
^{しじゅんせつちゅう ごせいたい}とはいえ、その四旬節中にミサにあずかることができず、また御聖体
^{げんそん しゅ いっち きかい れいてき はいりょう げんてい もく}のうちに現存される主との一致の機会も霊的な拝領に限定され、黙
^{そうかい つう しんこう み なお きかい}想会などを通じて信仰を見つめ直す機会もなくなってしまったことは、
^{じしんひじょう ざんねん きょうく たい ほんだん}わたし自身非常に残念ですし、教区に対してそのような判断をせざる
^{え たいへんこころぐる おも}を得なかったものとして大変心苦しく思っております。

もちろんミサがないことだけで、わたしたちの^{きょうかいきょうどうたい ほうかい}教会共同体が崩壊して
しまったわけではありません。この^{ききてき じょうきょう ちよくめん なか}危機的な状況に直面する中で、
^{しんこう むす きょうだいしまい}あらためて、わたしたちは信仰によって結ばれている兄弟姉妹なのだ
^{いしき とも おな からだ かたちづく}という意識を、さらにわたしたちは共に、同じキリストの体を形作って
^{い いしき こころ きざ おも}いるのだという意識を、心に刻んでいただければと思います。

いの^{むす とも こんなん た む きょうだいしまい}祈りのきずなによって結ばれて、共に困難に立ち向かう兄弟姉妹とし
^{しんこう うち れんたい くらやみ なか みなもと}て信仰の内に連帯しながら、この暗闇の中で、いのちの源であるキ
^{ひかり かがや}リストの光を輝かせましょう。

わたしたちは、^{くらやみ なか と のこ}暗闇の中に^{ひとり しんこう}取り残されて、一人で^{かみ あた たまもの}信仰をまもろうとして
いるのではありません。わたしたちは、^{とも い}神から^{ぶつりてき はな}与えられた^{みな あつ}賜物であるの
ちを共に生きてるように、^{こんなん}物理的に^{おな しんこう うち}離れていても、たとえ^{とも いの}皆が集まるこ
とに^{いっ}困難があつたとしても、^{しよ}同じ^{ちから あ}信仰の内に^{しんこう}あつて共に^{いっ}祈ることで、一
緒になつて^{しよ}力を^{しんこう}合わせて^{いっ}信仰をまもっています。

パウロはエフェソの^{きょうかい}教会への^{てがみ なか}手紙の中で、わたしたち一人^{ひとり}ひとりに、^{おも}主
に^{むす ひかり こ あゆ}結ばれて「^よ光の子として^{ひかり}歩みなさい」と呼びかけます。その「^{ひかり}光から、
^{ぜんい せいぎ しんじつ しょう}あらゆる善意と正義と真実とが^{しる}生じる」と記されています。

わたしたちは、^{くらやみ なか ぎしんあんき さいな}暗闇の中で^{しやかい}疑心暗鬼に^{おも}苛まれている^{しやかい}社会にあつて、キ
リストの^{ひかり かがや}光を^{ぜんい せいぎ しんじつ しょう}輝かせ、「^{つと}善意と正義と真実」を生じさせるように^{おも}努
めたいと思います。

パウロは同じ^{おな}手紙の中で、わたしたちが^{てがみ なか}光の子として^{ひかり こ}先に^{さき ひかり かがや}光を輝か
せるのではなく、^てまず「^{しる}キリストはあなたを照らされる」と記しています。
しかし、^{じょうけん}そのためには^{しる}条件があるとも^{ことば}記されています。それはその^{ことば}言葉
の^{ちよくぜん}直前に^{ねむ}ある、「^{もの お}眠りについて^{ししや なか}いる者、^{た あ}起きよ。死者の中から^あ立ち上
れ」と^い言う^{ことば}言葉に^{しめ}示されています。

わたしたちは^{ひかり}キリストからの^て光の^う照らしを^{た あ}受けたから^あ立ち上がる^あことができ
るのではなく、^{た あ}わたしたちが^{けっか}立ち上がるからこそ、そこに^{けっか}結果として
^{ひかり}キリストの^て光が^{ひかり}照らされるのだ、^{ひかり}というのです。^{ひかり}すなわち、わたしたちが^{ひかり}光
の子として^{こ かがや}輝くためには、^{ひかり}キリストからの^て光の^{ひつよう}照らしが^{ひつよう}必要であつて、
^てその^う照らしを受けるためには、^{しゅたいてき こうどう}わたしたちの^{しゅたいてき}主体的な^{こうどう}行動が^{しゅたいてき}まずなければ
ならないのです。

^{ふくいん}ヨハネの福音では、^{いけ い}シロアムの池で^{もうじん はなし}癒やされた^{しる}盲人の話が記されていま

す。もちろん冒頭で、イエスは土をこねて盲人の目に塗るのですが、そこで本人の行動を促します。

「シロアムの池に行って洗いなさい」

盲人は自ら行動することによって、癒やしをえるというキリストの光に照らされることになるのです。そして、さらには、福音には、「帰ってきた」と記されています。すなわち、キリストに導かれながら自ら行動したことによって光に照らされた盲人は、その光の源であるキリストから離れることはなかった、キリストの光の内にとどまったということです。

その一連の行動を、律法の規程に背いているとして咎め立てるファリサイ派の人たちは、キリスト光の内にとどまることのない人の姿を現しています。

自らの常識やプライドにがんじがらめにされているため、目の前で起こっている事実を、自分の世界の枠組みの中でしか理解することがありません。その目には、キリストの光は届いていないのです。

福音の中では、ファリサイ派の人たちとイエスとの立ち位置の違いが象徴的に描かれています。イエスは外に立っている者として描かれ、ファリサイ派の人たちは自分たちの場所の中にとどまっているように描かれています。目の不自由な人は、翻弄されながら、その間を行き来していません。

キリストの光は、自分たちの殻に閉じこもり、常識とプライドの中にあんじゅうもとなかひととど安住を求めている中の人たちには届いていません。そこには、善意と

せいぎ しんじつ か
正義と真実が欠けてしまっているのです。

とはいえ、ファリサイ派の人たちが、取り立てて悪人であると断罪すること
とは、わたしたちにはできません。なぜならそこに描かれている姿は、わ
たしたちそのものでもあるからです。わたしたちは、個人としても共
同体
としても、自分の思いや社会の常識や長年の伝統やプライドを優先
させて、時としてそれを守ることに力を傾けてはいないでしょうか。

せつきよくてき でむ きょうかい すがた と つづ きょうこう
積極的に出向っていく教会の姿を説き続ける教皇フランシスコ
は、今年の四旬節メッセージにこう記しています。

しゅ かいしん じき ほうほう つかさど じぶん おも ちが
「主への回心の時期や方法を司るのは自分だといううぬぼれた思い違
いで、この恵みの時を無駄に過ごすことのないようにしましょう」

うえ きょうこう たみ あ の みちび
その上で教皇は、「イスラエルの民のように荒れ野に導かれましょう。
そうすれば、花婿であるかたの声を ついに聞き、その声を心のうちで、
より深く意欲をもって響かせることができるでしょう。そのかたのことばに
すすんで関わればそれだけ、わたしたちに無償で与えられる主のいつくし
みをますます味わえるようになります」と述べています。

きょうこう しじゅんせつ しる
さらに教皇は四旬節メッセージにこう記します。

「イエスにおいて、神の熱意は、ご自分の独り子にわたしたちのすべての罪
を負わせるほどに、また教皇ベネディクト十六世が述べたように、「自
らに逆らう神のわざ」となるほどまでに高まります。神はまさに、ご自分
の敵さえも愛しておられるのです」

たびじ しゅやく ひかり あい
わたしたちの旅路の主役は、光であるキリストです。わたしたちを愛す

るがあまり、先頭せんとうに立たって十じゅう字じ架かを背せ負おい、わたしたちを導みちびいてくださ
るキリストです。自分じぶんという殻からを打うち破やぶって外そとへと出で向き、行こう動どうするよう
に促うながすキリストです。

わたしたちはこのキリストに、ひとりしたがでつき従したがうのではなくて、神かみの民たみと
して、共きょう同どう体たいとしてつき従したがっています。それは光ひかりの子ことして、わたし
たち一人ひとりひとりが、そして共きょう同どう体たい全ぜん体たいが、この世界せかいに「あらゆる善ぜん意い
と正せい義ぎと真しん実じつ」を生しょうじさせるためであります。神かみが求もとめられる世界せかいを
実あら現わし、神かみの聲こえに身みをゆだね、神かみの愛あいを分わかち合あうために行こう動どうする
共きょう同どう体たいとなるためであります。

困難こんなんな状じょう況きょうの中なかにあつて、互たがいに祈いのりの内うちに結むすばれて、キリストを証あか
ししていく者ものとなることができるように、招まねかれる主おもに従したがって一いっ歩ぽ先さきへ
と歩あゆみ続つづけたいと思おもいます。